

め で る

vol. 3



8月 宿泊研修 近江商人屋敷



8月 「家庭医 in 滋賀」
ワークショップ2012



8月 宿泊研修 学生交流会



8月 宿泊研修 蒲生病院屋上にて



8月 宿泊研修 滋賀病院 院内見学の様子



10月 滋賀医大 学園祭ブース出店

2012.12

目次 Contents

- スポットライト **人々の健康な生活を支えるライフサポーターとしての看護協会**
滋賀県看護協会 会長 石橋 美年子… 2・3
- 特集① 『家庭医 in 滋賀』ワークショップ2012 …… 4～7
- 特集② 夏の宿泊研修 in 永源寺等東近江方面 …… 8～16
- 地域自慢 甲賀市の玄関 貴生川駅周辺は自然がいっぱい …… 17
- 「人」 あざいリハビリテーションクリニック 院長 松井 善典 …… 18・19
- 訪問看護 NPOみなくち訪問看護ステーション …… 20・21
- 病院紹介 市立長浜病院／長浜赤十字病院 …… 22～25
その他報告・ご案内／会員の現状・入会のご案内／編集後記 …… 26～28

人々の健康な生活を支える ライフサポーターとしての看護協会



滋賀県看護協会
会長 石橋 美年子

看護協会は、日本看護協会及び、47都道府県にそれぞれ設置されています。全国約65万人、滋賀県では、約7000人の看護職が会員となっている看護職能団体の組織です。

さらに、各都道府県では、保健医療圏域に支部を置く組織となっています。看護職は、赤ちゃんから高齢者まで、すべての人々に、生命の誕生から、健康を保持し、健康を増進し、病気の予防、病気からの回復、在宅での療養生活、苦痛を和らげること、安らかな死への看取りまで人生のあらゆるステージにかかわっています。

看護職の活躍の場は、病院や診療所、訪問看護ステーション、介護保険施設、福祉施設、助産所、学校、企業、市町村、保健所などさまざまです。

さらに、看護職は、社会の変化とニーズに合わせ、新たな役割を切り開いています。専門看護師や認定看護師の養成、訪問看護と小規模多機能型居宅介護を組み合わせた複合型サービスの開業、また予期せぬ事態にも対応するために災害支援にも取り組んでいます。

“いつでも、どこでも、だれにでも、社会の期待、人々のニーズに応える看護を、より質を高めて提供していきたい”これが看護職の願いです。

1. 看護協会の仕事（活動）

大きく三つの柱があります。

一つの柱は、看護職への教育サポートです。

<生涯教育の推進>

看護専門職として、より質の高い看護実践、看護管理や施設内教育を展開するために必要となる知識・態度に関するプログラムを実施しています。



<看護学会>

<滋賀県看護学会>

看護職が日頃の成果を発表し、相互の連携を保ち今後さらなる看護サービスの向上を図ることを目的として開催しています。

<診療所、福祉施設、訪問看護ステーション、小規模施設看護職員研修>

研修センターなどでの研修の参加が難しい看護職の方に、身近な場所で、受講しやすい時間に受講できる出前講座形式の研修プログラムを開催しています。



<滋賀県看護協会>

二つ目の柱は、地域住民の保健看護活動です。

<訪問看護ステーション事業>

東近江市八日市に「在宅ケアセンターみのり」を開業、運営し、訪問看護、居宅介護支援、療養通所介護を行っています。



<在宅ケアセンターみのり>



<まちの保健室>

地域の皆さんに寄り添う看護職でありたいと願い、健康相談、血圧、体脂肪、骨密度の測定、育児指導、禁煙指導などの活動を行っています。

<災害支援ナース>

災害支援ナース養成研修基礎編・実務編を受講し、災害支援ナースとして認定された看護師が登録し、有事に際して活動する制度を設けています。



<まちの保健室>



<災害支援ナース>
東日本大震災被災地へ
出発 日本看護協会前

三つ目の柱は、ナースセンター事業です。

<ナースバンク>

就業先を探している看護職と看護職員を雇用したいと考えている施設に、それぞれ登録していただき、無料で職業紹介をしています。

<潜在看護師の掘り起こし事業（リスタートナース支援事業）>

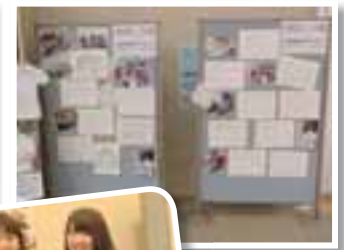
在宅医療福祉を担う看護職員確保対策として、現在看護職から離れている3000～5000人と推定される方々に、ハローワークや、マザージョブステーションに再就業コーディネーターを派遣し相談に応じています。さらに再就業支援研修を行い、在宅医療福祉を担う看護職員の確保を行っています。

<看護の心普及事業>

少子、高齢社会、多死社会を支えていくためには、看護の心、支えあいの心を国民一人一人が分かち合うことが必要です。ナイチンゲール生誕を記念して「看護の日」が制定されています。“看護の心をみんなの心”をテーマに地域の皆さまのそばで「まちの保健室」や「ふれあい看護体験」「高校生看護1日体験」「小中学生に対して看護の仕事魅力啓発」「進路相談」などを行っています。



小中学生に対して
看護の仕事魅力啓発



<看護の日>



高校生看護一日体験

2. 地域医療へ果たす役割

私達のミッションは、「人々の健康な生活の実現に貢献する」としています。

県民の健康のニーズに応えるために、ライフサポーターとして、活動の三つの柱を展開し、地域医療へ果たす役割としています。

その実現のために、年度ごとに重点事業を策定し取り組んでいます。

今年度の重点事業は以下の5点としています。

1. 安心して働き続けられる職場環境づくりとワーク・ライフ・バランスの取り組み
2. 社会のニーズに対応した看護を提供できる体制づくりの推進
3. 療養生活を支える訪問看護の推進とサービス提供体制の確保
4. 県民への健康情報と看護職の魅力の発信
5. 公益社団法人に向けての準備（平成25年4月1日）

滋賀県看護協会を、広く一般の方に知っていただき、健康な生活を支援するサポーターに、また地域の方に看護活動を通して身近な存在となる看護協会にしていきたいと願っています。

「家庭医 in 滋賀」 ワークショップ2012

大学だけでは、なかなかイメージすることのできない「家庭医」という医師像を少しでも知ってもらうために、県内各地域で働いている医師の働きを、医学生の皆さんに体験してもらうワークショップを、今年も自治医科大学滋賀県出身者同窓会「さざなみ会」との共同で開催しました。



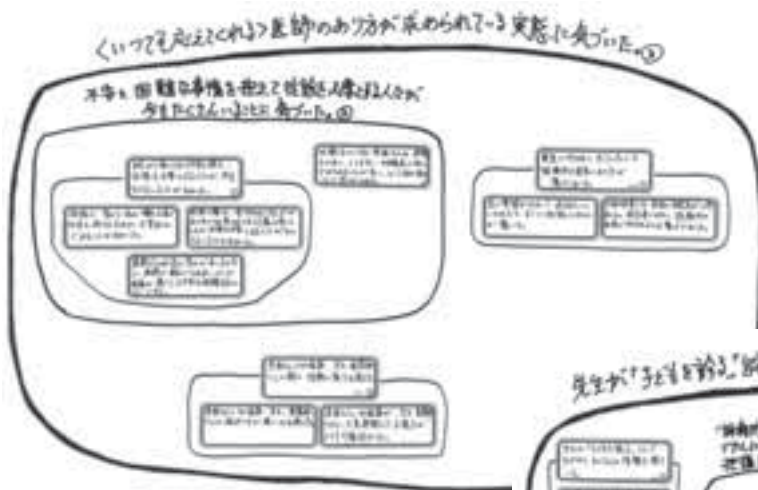
■ 体験学習 ■

夏休みの2日間、参加学生が希望した、あざいリハビリテーションクリニック（1名）、高島市朽木診療所（2名）、長浜市永原診療所（2名）、東近江市あいとう診療所（2名）、東近江市永源寺診療所（2名）、東近江市湖東診療所（2名）、地域包括ケアセンターいぶき（2名）において、体験学習を実施させていただきました。

■ 報告会 ■

8月25日にピアザ淡海で開催した“夏のワークショップ2012”では、霧芯館の川喜田晶子先生を講師にお招きし、「KJ法概論」の説明を聞いた後、参加者は3チームに分かれて「狭義のKJ法」作業の最終部分を体験しました。

「東近江市永源寺診療所ホームページ」に掲載されている地域医療実習を体験した実習生の感想文をもとに、すでに川喜田先生が作成されていた51枚のラベルによる統合結果の図(A～E図5つのグループに統合)とその最終統合の文章は次の通りです。

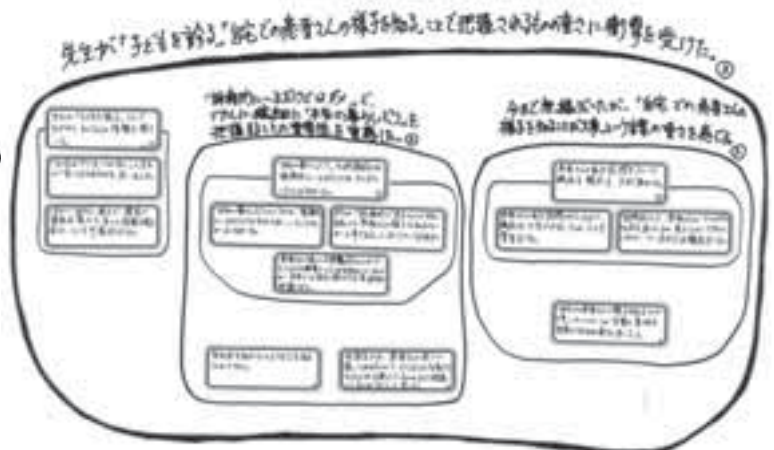


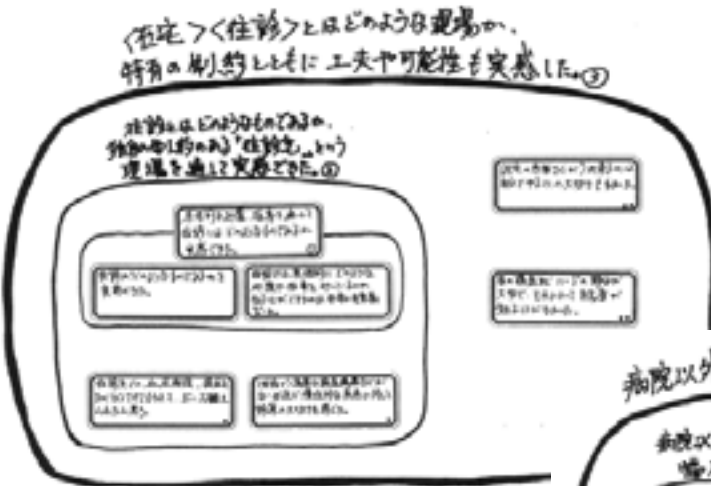
A図：

〈いつでも応えてくれる〉医師のあり方が求められている実態に気づいた。

B図：

先生が「子どもを診る」「自宅での患者さんの様子を知る」ことで把握されるものの重さに衝撃を受けた。





C 図：

〈在宅〉〈往診〉とはどのような現場か、特有の制約とともに工夫や可能性も実感した。

D 図：

病院以外の看取りの選択肢を豊かに確かめられた。

病院以外の看取りの選択肢を豊かに確かめられた。

病院以外の看取りの選択肢を豊かに確かめられた。



E 図：

固有の複雑な貌をもつ〈個人〉〈家族〉〈地域〉にまるごと寄り添う先生の姿があった。

参加者は各班ごとに、この5つの図を模造紙上に配置し、それぞれに〈シンボルマーク〉とよばれるイメージ豊かな言葉を与え、関係線を記入して、図解全体のタイトルを考える、という作業を行い、「狭義のKJ法」図解を完成させる体験をしました。A～Eの5つに統合されたそれぞれのグループの〈志〉を聴き取り、創造的に発想して構造化する作業です。その結果、実習生たちの感想というデータ群から、地域医療とそれに携わる医師のイメージが浮かび上がってきます。

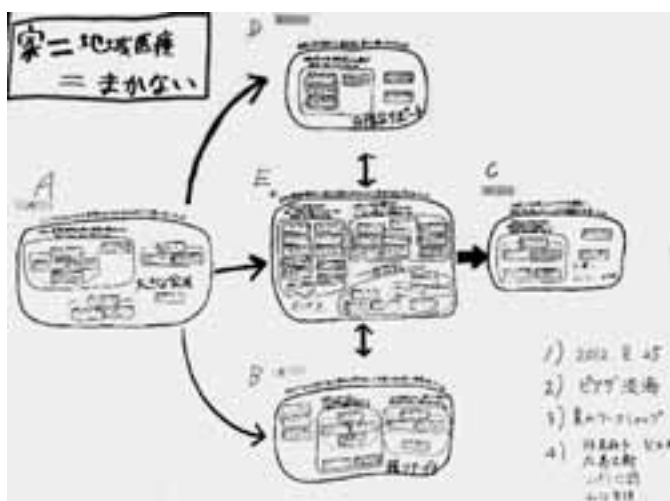
各班の5つの図に対するシンボルマーク及び図解全体のタイトル

	1 班	2 班	3 班
A 図	暮らし安心クラシアン	大きな家族	地域の支え
B 図	プラチナバンドばりのアンテナ	掘り下げる	ストーリーの把握
C 図	あなたに優しいソフランチ	医療のまかない料理	あるもので工夫
D 図	あなたに合ったプランを (アリコ)	多様なサポート	看取りの多様性
E 図	あなたとコンビに (ファミリーマート)	寄り添医	よりそい
タイトル	～あなたの町のTBS (頼れる・敏腕・先生)～	家＝地域医療＝まかない	人～まるごとを診る～



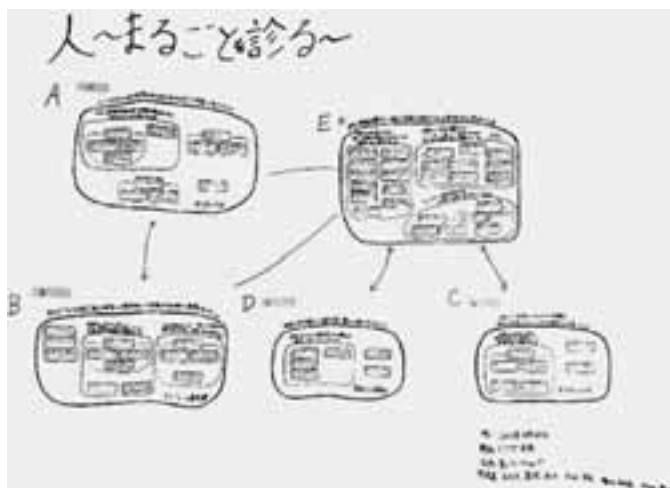
【1班】

それぞれの島（統合されたラベルのグループ）の質を企業・商品名にたとえながら、結局、多彩な能力が地域医療の担い手には要求されることを訴えかけている図解、と言えます。



【2班】

地域医療の現場を一つの「大きな家族」にたとえています。医師は、さながら大家族をきりもりする有能な主婦、のイメージでしょうか。



【3班】

人、まるごとを診る。そのためにさまざまなハードルを超える医師像、といった感受が浮かび上がる図解です。

（図解についての簡単な解説は、川喜田晶子先生）

この「KJ法概論」をご指導いただきました川喜田先生から、「今回参加された地域医療を志している学生さんの想いは、すでに“いかに患者さんに寄り添うか”に強く向けられているように感じられました。これは頼もしいと思った次第です。」とのお言葉をいただきました。

昼食・休憩をはさみ午後からは「地域福祉・在宅看取りの地域創造会議」総会に参加しました。

■参加学生からの感想■

★実習はどうでしたか

長浜市立永原診療所

- ◆地域医療への熱意に満ちた先生のご指導の下、有意義な実習ができました。
- ◆実際に地域医療を見て体験させてもらうことで、普段の授業では得られない貴重な経験を得ることができた。

ケアセンターいぶき

- ◆もう少し医療実習をしたいと思います。
- ◆伊吹市はとても広いので、フィールドワークが大変であり、往診の苦勞が感じられた。

東近江市あいとう診療所

- ◆色々な実体験をさせていただいて、医師の仕事がある程度わかった気がしました。大変良い経験でした。
- ◆たくさんのお話をさせていただきました。熱心に教えていただき、とてもいい体験でした。

東近江市永源寺診療所

- ◆毎回良い研修をさせていただいている。行ってみたい。本当に楽しく、色々なことをさせていただきました。

東近江市湖東診療所

- ◆色々経験でき、大変勉強になりました。
- ◆夏期研修は毎年病院では経験のできない研修なので、貴重だと感じ、日々の学習のモチベーションが上がりました。

あざいリハビリテーションクリニック

- ◆実習前に実習に際する目標を聞いていただき、それに沿って自習プログラムを作っただけで、とても充実した実習ができたと思う。2日目は薬学の学生の実習報告会にも参加できた。

朽木診療所

- ◆実際に手を動かす機会がたくさんあり、とても充実した実習でした。最近では少し離れていた医療、医

者について考え直す良い機会でした。

- ◆病院実習ではなかなか見たり体験したりすることができないことを体験することができた。



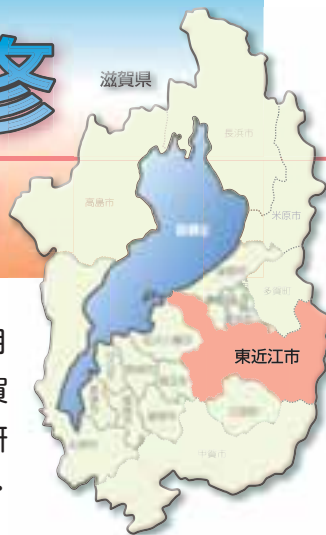
★KJ法体験はいかがでしたか

- ◆かなり難しかった。もっと勉強したいと思う。
- ◆難しかったです。問題解決の手法の一つとして今後活用したいです。
- ◆普通の分類とかではなく、とても難しかったが、こういう考え方もあることがわかってとても面白かった。
- ◆難しかったが、発表の多様性を見て、面白かったです。
- ◆一つ一つの島が共通していることを考えるのは、思ったより難しいことだった。ただ、より真実に近い考えだけを導くには効率のよい方法だと思う。時間が十分にあるときには、この考え方も有効だと思う。
- ◆今までの思考経路とは全く違うもので、非常に難しく感じた。しかし、新たな視点で統合できることは、貴重な体験で、今後も忘れることなく利用していきたい。
- ◆医療だけではなく、雑多な問題が生じる地域医療においては、KJ法のような問題解決技法の重要性を感じました。
- ◆最初は難しく感じましたが、プレゼンをするときには発表しやすく、作成する過程の中でも整理されているように思いました。
- ◆イメージがつかなくて取りかかるところから苦勞しました。また機会があれば行きたいです。
- ◆今まで触れたことのない新しいやり方で、いろいろとためになったと思う。
- ◆漠然とした答えしか出せなかったが、次はもっとはっきりとしたものを作りたい。
- ◆活用法も考え、楽しいだけで終わらないようにしたいです。



夏の宿泊研修

in 永源寺等東近江方面



「永源寺等東近江方面の医療と歴史・文化を学ぶ」と題し、8月28日(火)～29日(水)の2日間、滋賀県で学ぶ医学生・看護学生や滋賀県出身の医学生・看護学生を対象に地域・医療理解の為の宿泊研修を実施しました。今回は、滋賀医科大学と自治医科大学の医学生・看護学生合わせて14名を含む総勢23名での研修となりました。



1日目 旧蒲生町、永源寺町の病院・診療所・地域の見学を行い、旧湖東町で宿泊しました

東近江市役所 (講演)

西澤市長から東近江市の医療状況や中核病院の病院改革など医療政策について説明を受けました。



東近江市立 蒲生病院 (説明・見学)

病院の概要や市立2病院の改革について説明を受け、院内の見学をしました。

蒲生地域を一望できる屋上にて



永源寺診療所 (説明・見学)

診療所内を見学後、「在宅医療・地域包括ケア・地域とともに」というテーマで花戸先生の活動や地域医療についてのお話を聞きました。

研修中の滋賀医大卒の研修医から学生たちへアドバイス!!



臨済宗永源寺派大本山永源寺 (散策)

ボランティアガイドによる案内と、ご住職によるお話を聞きました。



クレフィール湖東 (交流会・宿泊)

交流会第1部

フォトジャーナリスト 國森 康弘さんのご講演

テーマ「写真スライドによる『看取り』」

小串医院 小鳥 輝男先生のご講演

テーマ「医師不足・医療崩壊の危機の中で地域の医療福祉の連携により住民を支える三方よし研究会の歩みと挑戦」

交流会第2部

西澤東近江市長をはじめとする訪問先の方々・里親やプチ里親の方々等にもご参加いただき、それぞれのお立場からご意見をいただきました。学生や教職員からは、当日の研修の報告や意見を発表する等、貴重な交流の場となりました。



プチ里親の方からもご意見をいただきました。



2日目 旧五個荘町、旧八日市市、旧愛東町の病院・福祉施設・地域の見学を行いました

てんびんの里 近江商人屋敷 (散策)

国の重要伝統的建造群保存地区に選定された「五個荘金堂の町並み」にある、外村繁邸・外村宇兵衛邸・中江準五郎邸を見学。

近江商人の心得
三方よし「売り手よし・
買い手よし・世間よし」



**結の家デイサービスセンター
デイサービスセンター加楽
障害者就労継続支援湯屋の里 (説明・見学)**

学生は3班に分かれて、東近江市から紹介いただいた福祉施設を訪問し、説明を受け見学をしました。



論文で世界へ向けて
発信できます

国立病院機構 滋賀病院 (説明・見学)

来見副院長から病院の概要や新体制についての説明を受け、院内を見学しました。また「東近江市の地域特性と疾患」というテーマで、前田内科診療部長からご講演いただきました。



訪問先の皆さまから

地域医療のフィールドとしての東近江市

東近江市長
西澤 久夫



「地域医療」という言葉が使われ始めたのは1970年代ころからで、すでに40年以上の歳月が流れています。東近江市のような地方都市では、「地域医療」とはさまざまな人々の営みを包括した中での医療を意味すると解せば、この東近江市は絶好のフィールド＝「地域医療現場」といえます。高齢化率が50%を超える限界集落もあれば市街地もある。東近江市は人口、面積などおおよそ日本の千分の一の規模です。

私達は地元＝東近江市で、食糧、医療・介護、エネルギーを自給自足することを目指しています。それを、「東近江市モデル」と呼んでいます。

では、東近江市は、どのような「地域医療」を目指しているのか。

東近江市では、家族や地域で「在宅看取り」をされている永源寺診療所などの活動があります。この「在宅看取り」を積極的に展開し、実践しているのが、脳卒中の後遺症があっても住み慣れた地域や自宅で生活できるようにと始まった「三方よし研究会」の脳卒中連携パスの取り組みであり、いま、全国から注目されています。

一方、急性期医療については、東近江総合医療センター（国立滋賀病院）に滋賀医科大学の寄附講座（「総合内科」と「総合外科」学講座）が開設され、多くの研究者や医師を派遣していただいて東近江市の中核病院と位置づけました。

一次医療や在宅支援の医療機関としては、新たに「家庭医」養成に取り組む蒲生医療センターと、「在宅看取り」を支援する『在院看取り』を導入しようと検討している能登川病院などがあります。また、先端医療を担う民間の医療機関や、療養医療を担う病院、多くの個人医院が連



▲市役所での市長ご講演の様子

携して、東近江市民の医療を支えていただいています。

まだまだ、多くの課題が存在します。しかし、その課題を医療関係者、介護関係者、行政、そして、何よりも市民が考え、相互に意見交換を行い、連携を広め、深めるよう取り組んでいます。これが東近江市の目指している「地域医療」です。

この機会を通じて、地域医療の担い手医師、看護師、保健師となって、私たちのまち、東近江市へ来られることを期待しています。

注)「在宅看取り」を支援する『在院看取り』とは、家庭の事情などで在宅看取りができない場合やレスパイト入院など、最終末あるいは一時的な入院で、積極的医療をしないことを認めている人の入院を言います。

夏期宿泊研修を受け入れて

独立行政法人国立病院機構滋賀病院
院長 **井上 修平**



宿泊研修2日目の2012年8月29日午後、14名の医学生・看護学生が当院を見学に来られました。3年前の同研修では35名の学生が来られましたが、当時は京都府立医大の医師引き揚げによる診療機能の低下及び病棟閉鎖を行った医療崩壊寸前の寂しい姿を見学して頂き、医師不足の現状を考えて頂く研修しか当院では行う事ができませんでした。しかし、今回は滋賀県地域医療再生計画（東近江医療圏）の策定により、滋賀医科大学・滋賀県・東近江市・国立病院機構の四者が協力し合い、この地域の中核病院(320床の東近江総合医療センター)設立に向かって努力している姿を見学してもらえる研修となりました。

現在の当院は、大学からの医師派遣による支援によって診療機能は回復し閉鎖病棟も再開棟でき、更には7階建て新病棟の整備が進み、また、一方では当院敷地内に休日急患診療所等が入居する地域医療支援センターの建設も始まろうとしています。地域から信頼される病院になるためには、当然、建物だけでその役





▲院内見学の様子

割が果たせる訳ではなく、患者さんの為に熱意をもって働く人が十分にいて初めてその機能を発揮するのです。当院は、医師の他、看護師・コメディカル等も増員し、職員数はこの3年で50人以上増え、活気あふれる病院にはなってきましたが、まだまだ常勤医師や看護師、コメディカルは不足しており、順風満帆な船出とは言えない状況です。滋賀県だけの問題ではありませんが、日本の医療を担おうとしている学生が、この学生の時期に医師及び看護師等の確保困難地域が抱える問題を認識できる機会が得られる研修に参加することはとても重要です。この様な研修が全国に広がれば望ましいと考えております。

学生たちも今から数年後には、卒後研修先や自分の進む診療科を決めなければなりません。当院は2013年から基幹型臨床研修病院の指定を受ける準備をしています。総合内科・外科を中心とした充実した研修プログラムを通じて総合医もできる専門医の養成をしていく方針ですので、是非とも応募して頂きたいと思っております。

また、看護学生には奨学金制度も用意しております。是非利用して頂いて皆さんの就職先にして頂きたいと思っています。そのためにも私たちは魅力ある病院作りをしていきます。この里親学生支援プログラムを経験された皆さんも、研修で得た経験を進路の一助にして頂き、この研修が先輩から後輩にも伝達されていくように幅広く発展していくことを願うとともに、当院もあらゆる面で協力していきたくと考えています。

研修を受け入れて

東近江市立蒲生病院
事務長 徳田 嘉治



8月28日(火) 午前中、医学生、付添の方を合わせて21名が当院を訪問されました。計画では、施設見学を予定されていましたが、午前中だったので外来診察を行っており、院内の施設を見学していただくことができませんでした。そのため、(仮称)

訪問先の皆さまから

蒲生医療センターへの移行計画などわかりにくい話を私が説明。学生さんの心を読んで埒田先生からうまくフォローをしていただき、少しは市立病院の状況も理解していただいたのではないかと思います。当院は来年4月から(仮称)蒲生医療センター(病床数19以下)として新たにスタートします。家庭医と現医師とが協力しながらの医療体制を構築し、地域包括医療を実践します。ひとりでも多くの医学生がこの研修を通じて広い視野をもった地域医療を担う医師を志していただくことを期待しています。



宿泊研修を引き受けて

東近江市永源寺診療所
所長 花戸 貴司



「先生、ありがとう」
医学部に入って半年も経たない頃、患者さんから言われたことを今でも覚えている。はじめて診療所実習に行かせてもらったのは一年生の夏だった。診療所勤務の先輩医師と看護師さんから血圧測定の手技を教えてもらい、診察前に血圧を測らせてもらっていた。最初は後ろにいる先生に向かって言っているのかと思ったが、違う、こちらに向かって頭を下げてくれた。当時は、なぜ私なんか頭を下げているのか、わからなかった。血圧測定が終わって診察をする先輩の後姿を見ながらふと思った。血圧を測っている私への感謝ではなく、地域の人に「先輩のような医師になってください」と応援されているような気がした。

このことが今の私の原点だったかもしれない。

今回、現地研修の依頼があったときも、



訪問先の皆さまから

是非、永源寺の地とそこで生活されている人々の姿をみてほしいと思い引き受けた。当院の施設見学の後、学生の皆は地名にもなっている「永源寺」へ。お寺の住職をはじめお寺で働くスタッフの方々、観光ボランティアガイドさんが皆を迎えてくれたことだと思う。

実は、研修を引き受けた時に一番最初に相談したのは地域の皆さんだった。皆さんは気づかなかつたかもしれないが、今回の研修では地域の皆さんが医学生の皆の訪問を大いに歓迎してくれていたのだ。

今後、卒業までに実習を行うのは主に大学病院になると思うが、病気を抱えた人は病院の中にだけいるわけではない。病院で診る患者さんは、ごく一部の限られた人たちであり、多くの人は病気を抱えながらも地域で生活をしている。



▲地域医療についてのお話をききました。

地域医療というのは、地域の人とともに生活し、地域の人に寄り添う医療だと思っている。大病院にはできないことでも、診療所にしかできないことがある、と信じている。

またいつの日か、この滋賀の地で皆さんと一緒に仕事ができることを楽しみに待っている。

研修を受け入れて

特定非営利活動法人NPO結の家
代表 **太田 清蔵**



宿泊研修に参加のみなさま、8月28日・29日の2日間に渡っての研修おつかれさまでした。愛東マーガレットステーションのジェラードのお味はいかがでしたでしょうか。

2日目に結の家通所介護事業所を見学いただきました。とても狭い事業所ですので、ゆっくりご利用者のみなさんとお話いただく時間がとれず残念に思っております。でも、将来、医師や看護師となられる学生のみなさんに医療現場だけでなく介護現場を見学いただけたことはとても有意義なことだと思っています。歳を重ねるとともに医療の力を必要とすることが多くなる高齢者の方々ですが、身体的な苦痛や症状を的確に

伝えることができづらくなります。何を伝えたいのか、その真意を分かっている



▲交流会2部 参加学生との交流の様子

ただけで苦痛が和らぐものでしょうし、ましてや医師や看護師に分かっていただけたら安心感はひとしおです。高齢者の心の声を理解して下さる医師や看護師として滋賀の地域医療に携わっていただけることをご期待申し上げます。

研修を受け入れて・交流会に出席して

NPO法人 加楽
代表 **楠 神 涉**



当施設は東近江市東部の緑豊かな自然に囲まれた集落の中で、民家を改修した高齢者向け小規模デイサービス、相談事業、地域活動などを行っています。

地域理解・交流事業「宿泊研修」では、交流会及び施設見学に参加させて頂くことができました。

交流会では、講演後に学生報告会があり、地域医療に対する熱い思いから、現在の不安な思いまで、多くの声を聞かせて頂くことができ、当施設がある旧愛東町でも医療・福祉・地域が連携すれば今後も在宅での生活を応援できると改めて感じたいです。

2日目の研修では、4名の学生さんに施設見学をして頂きました。スタッフ総勢12名の小さな事業所ですが、当施設が行っている福祉事業の他、保育園・障がい者施設・ブラジル人学校との具体的な地域活動などについても熱心に聞いて頂くことができました。

未来の地域医療を担う学生さんに福祉現場の実際を見て頂けたことを嬉しく感じています。今回の宿泊研修で感じたことを学習及び将来の活動の場で生かして頂けることを願っています。



交流会に参加の皆さまから

「めでる」に寄せて

フォトジャーナリスト
國森 康弘



永源寺診療所の花戸貴司医師の
 往診風景を見ると、自宅で最期まで暮らしているご本人やそのご家族が、とても穏やかで温かい表情をしておられるのが印象的でした。

もちろん医師だけではなく、様々な専門職が顔の見える関係で繋がり、「在宅生活」を支えておられる。ご近所さんの自然体の見守りも、きめ細やかです。

亡くなる前に、「わざわざ家にまで診察に来てくれて、本当に助かった。ありがとうございます」と感謝を述べる方々が大勢おられました。

「医者」も「患者」も、地域の一員であり、生活者——。今回研修を受けられたみなさんが、これから医療人として生活者の「天寿」に寄り添い、また、病院や診療所を飛び出して「地域づくり」をも担う一員になって

くれれば、喜ぶ人は多いでしょう。

花戸医師は、白衣を脱いだ。その意味に思いを致してもらえたら、と願います。



▲「看取り」をテーマにしたスライドと國森さんの話に感動しました。

いつでも湖東診療所に 来て下さい

東近江市湖東診療所
 所長 **東野 克巳**



滋賀県大好き！滋賀県生まれの
 滋賀県育ち！湖東診療所の東野です。「地域医療を担う医師は地域医療を担う医師が育てる」「地域の良医は地域が育てる」。学生たちになるべく早くから地域医療の現場を知ってもらいたいと思い、里親&学外診療所実習の受け入れを行っています。今回は東近江（市）で宿泊研修が実施され、交流会場が「クレフィー

ル湖東”ということで（まさにご当地）、業務終了後急いで会場に向かいました。



▲交流会1部での様子

湖東診療所に赴任して16年。クレフィールでアルコールを飲まずに食事したのは初めてです。

学生たちが感銘を受けたであろうと思われる國森様のスライドショーも、小鳥先生の熱い“三方よし”のご発表も、小生は初めてではありませんでしたので、単に食事に行っただけになってしまいましたが、1年生2年生の学生たちから、「滋賀県のことをもっと知りたい」、「滋賀県の地域医療についてこれからもっと勉強したい」という話を聞いて、とても頼もしく感じました。いつでも湖東診療所に（見学・体験実習）来て下さいね。

交流会に参加して

東近江市 健康福祉こども部
 長寿福祉課 **川島 美子**



今回初めて、宿泊研修に関わらせていただきました。1、2年生方が中心でしたが、皆さん真面目。地域医療に関心を持ち、夏期休暇中にもかかわらず、熱心に研修にされていました。それと女性が多いことも印象的でした。

私は現在、介護保険を担当しています。介護保険認定審査には多くの先生にご協力いただいております。

また、介護保険のサービスを受ける場合上でも、医師、ケアマネジャーや事業所が連携し、適切なサービスが受けられるよう協力いただいております。

高齢者の生活を支えるには医療と介護は車の両輪。高齢になっても認知症になっても慣れた地域で住み続けるため、医療関係者、介護事業者等の皆様が連携し、制度を走らせていただいております。今回は先生のご講演の他、介護保険施設も見学いただきました。この経験を契機として、将来、当地域で皆様が家庭生活や子育てと両立しながら活躍していただけますことを大いに期待申し上げます。

交流会に参加の皆さまから

やれることから
やってみよう!

東近江市 健康福祉こども部
長寿福祉課 井口みゆき



今回の交流会には1年生の方が多かったですね。理由は様々でしたが、地域に目を向けながら医療の道を目指している学生がこんなにいてくれるんだと、これからの滋賀の姿が楽しみになりました。

でも、医療の関係者ばかりが同じ思いで繋がっている地域の方の暮らしが安心できるものではないでしょう。医療は暮らしの中の一部です。福祉や労働、環境、生きがいづくりなど、様々なこととも繋がって、はじめて安心できる地域になると思います。

今回の研修会ではそんなことを念頭に置いて、自分のできることからやってみようという行動されている方たちに出会われたと思います。今のうちから人と繋

がる楽しさ、自分のできることからやってみようという行動力と面白さを経験していただきたいです。



▲フリータイムでは各々に交流を深めました

東近江湖東診療所の東野先生のもと1週間の学外診療所実習の研修中であった、自治医科大学5年生の増田さんが、交流会に合流し宿泊研修の参加学生や地域の方々と交流を深めました。

交流会に参加して

自治医科大学5年生
増田 翔吾



今回、交流会に参加して、視野の広がるような、貴重な経験となりました。

國森さんの講演では、看取りや死というものに対して、人とのつながりや温かみのような、尊さを感じました。将来医師として人の死に立ち会った時に、このように患者と遺族が命のバトンを継承する場を提供できるかどうかと、深く考え直すことができました。

懇親会での参加者全員の自己紹介では、地域医療に関わっている方・関心を持っている方が、1つの地域だけでも、こんなに大勢いらっしゃり、特に、自分と同じ学生も地元の地域について関心を持っている方がこんなにもいるのだとわかりました。そして、おそらく目的は同じでも、各々で違う視点を持っているからこそ、話し合いを通して深め合うことができるのではないかと思います。地域医療についての興味がより強く湧いてきました。

将来は自分も医療従事者となり、色々悩みを抱える

かもしれませんが、その時にもこのような力強い先輩方や仲間となる人がいれば、頑張れるのではないかと思います。そして、ゆくゆくは自分もその輪の中に入り、広げていけるように日頃の勉学も頑張って取り組んでいきたいです。このような機会に参加させていただいてありがとうございました。



宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科2年生 木村 優香

2回目の参加です。東近江市の医療の大規模な再生事業を学びました。病院の経営や滋賀医大との連携、医学生への教育や市民講座など、様々なアプローチから市の医療をより良くしていこうという熱意と行動力に感銘を受けました。これからの事業の動向に注目していきたいです。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

滋賀医科大学 医学科1年生 梶野 真由果

今回、宿泊研修に初めて参加させていただきました。参加しようと思った理由は、滋賀県民として滋賀県の医療の現状について知りたいと思ったからです。研修先である東近江には行ったことがなく、滋賀県の地域医療の現状を知るだけでなく、滋賀県を知るいい機会になりました。

特に印象に残ったことは蒲生病院の閉鎖された病室です。今まで、地域では医師不足なのだとと言われても、自分の住んでいる場所には病院もたくさんあるので現実味がありませんでした。蒲生病院の見学で地域での医師不足を実感しました。

今回の研修で地域で医師として働くことについて考えさせられました。次回の宿泊研修にもぜひ参加させていただき、他の地域医療についても学びたいと思いました。

滋賀医科大学 医学科2年生 松浦 智史

「取り」と「三方よし」。今回の宿泊研修のおおまかな内容はこの二つの言葉に集約されていたように思います。医療施設や介護施設は本来の業務を行うと同時に地域の活性化にも一役買っている東近江市のシステムには、大阪で育った私にとってはとても新鮮で目から鱗が落ちるような思いでした。同時に大学に入って初めて滋賀で生活するようになって早くも一年半が過ぎましたが、改めて滋賀県のこと、また滋賀県の医療のことを何も知らないことに気づかされました。2日間かけてじっくりと多くの施設を回り、沢山のはなしをきくことができ充実していたように思います。

滋賀医科大学 看護学科1年生 三浦 樹

今回の宿泊研修ではさまざまな事が見られました。東近江市の医療を中心に学びましたが、蒲生病院での話は地域医療の難しさを感じさせてくれました。地域の人のニーズは理解できているが、それに対応するための多くの収益が、その地区の少ない人口ゆえ確保できない。そのためサービスを低下させると来院患者がさらに減るといった悪循環は生半かな努力では解決できないと感じました。医者は医療だけやれば良いわけではなく、医療を行うために経営方法や人員の確保の仕方など多くの事を考えなくてはいけないのだと新鮮な思いでした。ただ住宅地が新しく出来、若い人が増えているのは一つの希望であり、そこから解決の糸口を見つけられるのではないかと考えたりもしました。各地域ごとに異なる問題があるのだと思いますが、行政や民間組織とも協力してその土地の人によりよい医療を提供する努力全てが地域医療なのかも知れません。

他にも「三方よし研究会」といった地域医療を支え・考える人の繋がりを知る事ができ、今回の宿泊研修は人との繋がりを作っていく良いきっかけになったと思います。

地域医療の問題などは授業でも講義を受けましたが、実際に自分の目で見て体験してみると考え方や感じ方が全く違うものになります。頭で考えるだけでなく直接接してみることがなにより学習だとよくわかりました。そうした経験を出来たのはとても幸運で、参加して良かったと本当に思います。



▲学生交流会の様子

自治医科大学 医学科2年生 林 真麻子

今回初めて参加させていただきました。事情により1日目の交流会からの参加となりましたが、小島先生や國森先生の講演を聞いて、地域医療や看取りについて滋賀県の中でもどどんと考えて良くしていこうという動きがあるのだと知ることができました。自治医科大学という地域医療に特化した授業を行っている大学で学ぶ私にとってすごくモチベーションの上がる内容でした。また、2日目の近江商人屋敷への見学は地元でありながら知らなかった滋賀県の歴史を知ることができたので、新たな面を見て楽しかったです。さらに「障害者労働継続支援湯屋の里」の見学も、なかなか見ることができない施設を知ることができたことでいろいろ工夫を在宅でもできるようにするにはどうすべきか、と考えるいい機会になりました。

滋賀医科大学 医学科1年生 青谷 佳音

宿泊研修には、初めて参加させて頂きました。

普段遠い存在である地方自治体の首長、市長さんが自ら私たち学生にお話してくださったことで、私は東近江の医療に対する取り組みの姿勢の真剣さを感じることができたと思います。以前医学概論などで教えていただいた「三方よし研究会」について、より深く活動や理念を学べたこともよい経験になりました。地域医療を支えるために新たな制度、そして顔のみえる関係性を作っていかなければならないという考えを知ることができたことは、将来どんな立場であれ医療に携わる人間として役に立ちたいと思います。

また、永源寺を観光したことで、東近江の地域としてのよさというものも知ることができました。先生のお言葉で、地域が好きでなければ地域医療などできない、というものが印象にのこりました。確かにその通りだと思います。引越して各地点々としてきた私には強い故郷への想いはありませんが、だからこそ好きな地域をみつかり、そこで医療をまっとうできるようにしたいと考えました。

また、地域医療に興味を持ち集まった学生らと交流を持てたのもよかったです。とても楽しい思い出になりました。

滋賀医科大学 医学科1年生 吉澤 菜々

今回初めて宿泊研修に参加させていただきました。参加人数が思っていたよりも少なかったのですが、その分、先生方や他の学生とお話する機会が多かったように思います。滋賀県に長年住んでいるにもかかわらず、東近江市のことを全く知らなかったため、蒲生病院や滋賀病院、永源寺診療所、デイサービスセンターへの訪問などを通して東近江市での医療や介護の現状を自分で見て、聞いて、知ることができました。地域の医療機関同士が主な役割を分担して協力していく必要があるという考えが自分にはあまりなかったため、そのことが印象に残っています。ただ、病院の経営やベッド数の問題については、今の私には少し難しく、理解しきれないと思います。研修に参加する前に勉強していけば良かったなと思っています。

滋賀県での地域医療に興味がある私にとってはとても貴重な体験でした。これからもその地域の住民のニーズに応じた様々な形の地域医療に触れていきたいです。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科1年生 長田 有華

私は、地域医療に興味があったので、里親制度の宿泊研修に参加させていただきました。
東近江地域では、地域医療の質を向上させるため、様々な取り組みが行われていました。中でも、「三方よし研究会」に感銘を受けました。研究会では、いろんな職業の方が集まり、地域医療について議論をします。一つの職種だけで集まっている、それぞれが自分ごとばかりを考えてしまいがちです。しかし、そういった場を設けることで、地域全体を考えることができるようになります。もっと他の地域でも、取り入れていくべきではないかと思いました。
地域医療の衰退は、これからの日本の社会問題のひとつでもあります。どこの地域でも試行錯誤の段階だと思います。私は、この現実を頭にいれておきながら、医療の現場に携わっていきたいです。

滋賀医科大学 医学科1年生 成田 有里

私は今回初めて宿泊研修に参加させていただきました。研修で東近江地域の医療の現状を学び、地域医療について深く考える機会となりました。また、永源寺や近江商人屋敷を訪れたり、地元の料理を食べたりして東近江地域の魅力を知ることができました。2日目にはデイサービスセンター加楽に行かせていただいて、デイサービスセンターに対するイメージが変わりました。今回の研修から学んだことを活かし、これからの勉強につなげて行きたいと思います。

滋賀医科大学 医学科1年生 北奥 由美

私の地域では開業医や大病院が多いため、医療崩壊や医師不足を実感したことがなく、地域医療の問題についてあまり知識がありませんでした。しかし、今回初めてこの活動に参加させていただき、地域医療の現場を見学し医師不足の実態を目の当たりにして、自分が将来どのような現場で働くかについて考える上で大きな材料になりました。医師不足を抱える地域にも、多くの人が住み、多くの子供がいることを実感し、地域医療を活性化していく必要性を強く感じました。

滋賀医科大学 医学科1年生 山崎 開

今回の宿泊研修で永源寺診療所を見学させていただきました。診療所には診察室や治療室だけでなく、高齢者がリハビリを行うための器具をそろえたスペースがあり、地域に合った診療所となっていました。また先生は在宅医療も行っており、自身を東近江の専門医とっておられたため、地域医療とは、ただ病気を治すのではなく地域の人々のニーズにあった医療を行うことなのだと思います。
東近江の医療を支える先生方の話を聞き、地域医療に触れることができたため非常に有意義な時間がすごせました。

自治医科大学 医学科3年生 八坂 寛久

湖西地域、湖北地域に続いて今回で3回目の参加になります。前回までは滋賀県の中でも比較的僻地としての性格が強い地域で、絶対的な医療資源の不足、必要な医療へのアクセスの困難が大きな問題となっている印象でした。その点ではいくぶん地理的に有利に思える東近江市ですが、この数年のうちにやはり深刻な医師不足、病院機能の縮小を経験していたことを知り、地域の医療危機の問題が、私が認識していたほど単純なものではないことに気付かされました。今まさに市の医療体制を再編している途上ということでしたが、医師を安定的に確保し、住民のニーズに十分に答え、なおかつ採算に合うシステムを構築するというのは大変難しいことであることがわかりました。
在宅みとりのお話も印象的でした。永源寺で多くの人が、國森さんの写真に見られるような温かみのある最期を自宅で迎えられた背後には、花戸先生の365日24時間責任を持って在宅医療を支えるという姿勢があり、そしてそれが地域に根差し時間をかけて真摯に住民のニーズに耳を傾け、応えてきた結果としてあるということにとても意味があるように思えました。
東近江市には、三方よし研究会に代表されるように、医療、福祉、行政、住民の顔の見える関係づくりの場があり、地域の医療福祉について、あるいは「まちづくり」について職種や立場をこえて活発に議論できる雰囲気があることも大きな魅力だと思いました。医療体制の再編もあり、東近江市は総合医療、地域医療、家庭医療の中心地としてますます大きな役割を果たすことと思います。将来地域医療に携わる者としてこれからもその発展に注目していきたいと思っています。

滋賀医科大学 医学科2年生 高塚 淑子

宿泊研修は去年の夏に初めて参加し、今回は二回目になります。私は大阪出身のため、この研修は滋賀県のいろいろな地域の医療の様子を見ることができ、観光もさせていただけるので、とてもよい経験ができています。今回お話を聞いた後は、今回は東近江市長による医療改革についてのお話を聞いた後に蒲生病院、国立滋賀病院、介護施設結の家、そして医学概論に講義を受けた花戸先生の永源寺診療所にも行くことができたので、講義で話をされたことが実感できたと思います。また三方よし研究会の小鳥先生の講演もあり、東近江の地域医療の様子を理解することができました。また自治医大の方も宿泊研修や交流会に参加され、交流できたこともよかったです。とても充実した二日間でした。

滋賀医科大学 医学科1年生 吉岡 賢吾

今回の宿泊研修で訪れた東近江市では、深刻な医療問題を抱えていました。私達は、旧蒲生町で深刻な医師不足の現場を目の当たりにしました。蒲生では、蒲生病院の他に開業病院が一つしかなく、蒲生病院でも各診療科の医師がどれも不足していました。そんな中で永源寺診療所で花戸先生に伺った「地域包括ケア」という考えを知りました。医療人だけでなく、近所の人などの地域全体で患者さんをケアしようという考えです。チーム医療という言葉をよく聞きますが地域全体でチームを組むようで素晴らしい考えだと思います。実際に、地域の方々も三方よし研究会という地域の医療や介護、福祉などを考える研究会にたくさん参加されているらしく、地域包括ケアが実現するのにも遠くないなと思いました。



▲永源寺にて



▲近江商人屋敷・五箇荘金堂の街並み

～甲賀市の玄関 貴生川駅周辺は自然がいっぱい～

私が住む甲賀市水口町貴生川地区は、草津駅からのどかな田園風景を見ながらJR草津線に乗りすること約30分の貴生川駅の周辺です。この地域の自慢は豊かな自然と、2つの鉄道路線、そしてこの地域には医療機関が多いことです。

貴生川駅は、信楽高原鉄道、近江鉄道への乗継駅です。というと、活気のあるターミナル駅を想像されることと思いますが、駅前には殺風景で、ちょっと行くと目の前をそまがわが流れ、周りは山と丘陵に囲まれた自然豊かなところです。

この駅は鉄道ファンの方には魅力ある所かもしれません。春や秋の行楽シーズンには、カメラで電車を撮影されている方をよく見かけます。



貴生川駅

信楽高原鉄道は、旧国鉄信楽線が昭和62年から第3セクター鉄道となったもので、今年で25年を迎えます。貴生川駅から信楽駅を結ぶ延長14.7kmの鉄道で、昔は信楽焼きの重い陶器の出荷に、今は地域住民の足として重宝されています。

この鉄道の魅力は、力強く信楽高原へと上っていく列車の車窓から見える、春の新緑・秋の紅葉といった飾り気のない自然です。25年目を記念し、信楽焼きの狸をイメージし車両に描かれている絵柄が、かわいくイメージチェンジしました。



信楽高原鉄道

近江鉄道は、明治26年に地元有志により会社が設立され、明治31年に彦根～愛知川間(12.1km)を開業以来、愛知川～八日市間(7.4km)、明治33年に八日市～日野間(12.5km)、日野～貴生川間(9.9km)、昭和6年に彦根～米原(5.8km)、昭和19年には八日市鉄道株式会社を合併し、八日市～近江八幡間(8.7km)と徐々に走行距離が延び、地域住民による地域住民のための輸送機関として活躍してきました。近年は車の普及により利用者数は減少傾向ですが、甲賀・湖東地域の通学や、老人・子供には欠かせない交通手段です。



近江鉄道

土・日・祝日のみ使用できるSSフリー切符は1日乗り放題で550円です。貴生川駅から彦根駅まで乗車したことがありますが、格安でとても得した気持ちになりました。一度機会があればご乗車ください。のんびりとした1日を過ごせますよ。

貴生川駅周辺は田舎としてはめずらしく病院と薬局がたくさんあります。

市立の診療所をはじめ、歯科医院が3院、内科医院1院、小児科医院1院、皮膚科医院1院、産婦人科医院1院、眼科医院1院、整形外科医院1院、以上10院と、4つの薬局が集まっているので、病気の際にはとても便利です。

来春の宿泊研修は甲賀地域です。この地域に興味を湧いた学生の皆さん、よかったら宿泊研修で来てくださいね。



春のそまがわ川沿い



文：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
正会員 甲賀市水口町 在住
中森 愛子

あざいリハビリテーションクリニック

院長 松井 善典



「地域で働く家庭医になろうと思った理由を教えてください」

高校2年生までは教師を目指していましたが、一日看護師体験で見学した整形外科の手術に感動し、医師も選択肢になりました。生徒の可能性を拓く機会を提供する教師なのか、病気や怪我があってもその人らしい人生を癒し支える医師か、どちらの人との関わり方が良いか悩み、最後は神様に決めてもらおうと推薦で医学部、前後期で教育学部を受験し、滋賀医大に合格しました。

入学後は地域の方々に必要とされる診療所の小児科医を目指していました。子供の症状や病気だけでなく、育児支援や思春期の心のケアも行い、必要に応じてお母さんやお婆ちゃんの診療もし、地域の小中学校で健康のための授業もできる、そんな医師像がありました。

この医師像にぴったりだったのが家庭医でした。4回生の3月にこっそり聴講した教員向けの講義で家庭医という言葉と出会いました。講師の先生から「家庭医とは地域住民の暮らしの中で身近な健康問題を患者や家族と継続した関わりの中で提供する医師であり、家庭医になるには北海道に行くといいよ」との情報と助言を頂くことができました。その後弓削メディカルクリニックの雨森先生をはじめ多くのロールモデルの先生方や、今共に勤務している宮地先生など家庭医をともに志す仲間との出会いにも恵まれ、医学の傍流だけど地域医療のど真ん中であると感じた家庭医の道に進むことを決めました。



▲礼文島の小学校で「手洗い」の授業

「大学卒業後から今までの足跡を教えてください」

北海道で2年間の初期研修、3年間の後期研修、2年間のフェローシップ(家庭医療の診療・教育・研究・経営を学ぶコース)の計7年間で過ごし、8年目になった今年4月から地元の長浜で働いています。

初期研修

救急外来や病棟での急性期ケアはもちろん、診療所での外来・訪問診療、時にはホスピス病棟でのケアまでと、地域の中の医療ニーズ・ケアの連続性を感じられる多様な現場での研修ができました。家庭医になると決めてはいましたが、その科の研修医に徹して働くことを心がけ、各科の指導医から専門外来や緊急手術や時間外の外来でも御指導を頂けたことに感謝しています。

また週に半日の診療所研修があり、外来や訪問診療の経験のみならず、自分の診療をビデオで客観的にみて学ぶこと、日々の疑問から学ぶ方法、経験を振り返ることの大切さ、診断のための丁寧な思考とコミュニケーションのプロセ



▲小児科研修の一コマ

ス、様々な気付きや悩みからのプロとしての向上、医師患者関係の理想と現実、教育の楽しさと難しさ等、診療所で求められる医療とその周辺を学び深めることができました。

後期研修

中規模都市の無床の民間診療所、離島や郡部の有床の国保診療所、大都市の総合内科と小児科で研修しました。家庭医としての日々出会う疑問や悩みを含めて働くこと学ぶことの楽しさを実感し、忘れられない患者さん・家族と数多く出会い、教えを得ることができました。また総合内科の病棟では家庭医として必要な多様な入院管理の経験を積み、内視鏡研修や初期研修・学生の教育にも携わることができました。家庭医らしい診断方法と治療オプション、人の価値観や人生に寄り添うための自分の在り方を探索した時間となり、家庭医として生きる覚悟ができた貴重な3年間でした。



▲十勝の更別村の防風林の樹氷

フェローシップ

より深い家庭医療診療を、診療所の副所長として診療所経営を、指導医として家庭医療教育を、研究者の卵として臨床研究を学ぶコースでした。日々の診療・教育・研究・経営、それらをより深めるための毎週3時間の講義やグループディスカッションがあり、同期と指導医に恵まれた充実した二年間でした。医師としての活動の基盤には研究や教育があり、それが経営や臨床ともつながっているという感覚が少しずつ芽生え、それらは医師人生の中で一体となって高めるものであるという実感を得ることができました。



▲後期研修・フェローシップの修了式

滋賀に帰還しての日々

今年4月から故郷の長浜で勤務し、滋賀で働くことの楽しさとやりがいを感じています。新米院長なので経営面では悩むことつまずくことが多々ありますが、日々の外来と訪問診療では患者さんらしさ、その家族に応じた診療を継続し、病診連携や医師会活動、長浜市や福祉機関と協力した地域の仕事に携わることに喜びを感じています。またこの夏は10名ほどの学生さんが診療所に学びに来てくれ、母校の非常勤講師との機会と共に診療所ならではの教育の手ごたえも感じています。今までは長くても3年足らずでしたが、滋賀県での10年、20年もしかすると40年という単位で、数多くの仕事を通して貢献できればと思っています。

最後に、学生へのメッセージを…

学生時代はロールモデルやメンター・仲間との出会いの旅に出てください。これまでを振り返って、人生の転機も困難を乗り越えるためにも、尊敬できる人との出会いとつながりが重要だと感じています。学生時代から目指すべき先輩と出会い、あなたのことを応援し支援をくれる仲間や先生とつながった縁は一生ものです。是非出会った後も大切につないでその関係を育ててください。

働いてからは、自分を振り返る時間と家族や大切な人との時間を大切にしてください。自分を振り返る時間があるからこそ日々の臨床経験から学ぶことができ、家族や大切な人と過ごせる時間があるからこそ人としての余裕が生まれ臨床に反映されると感じています。

訪問看護とは

看護師などが自宅等を訪問し、療養生活を送っている方の看護を行います。療養の相談・日常の看護・介護者の相談、医師の指示による医療ケアを行います。病状の改善やよりよい療養生活をめざして、かかりつけ医師との連携を軸に、地域の保健福祉のサービス、各機関、施設担当者話し合い、在宅支援を行います。



訪問看護は1992年老人訪問看護として始まりました。その後、障害者や難病の方などへの訪問看護が可能となり、2000年には介護保険法による訪問看護が開始されました。

2000年以降、何度かの介護保険法・医療保険法の改正等に伴い、自宅で療養する高齢者、重度心身障がい児、難病、精神疾患の方々が年々増えています。又、最期の時を住み慣れた自宅で過ごされることも多くなりました。その自宅療養を支えるのが私たち訪問看護師の仕事です。

訪問看護は利用者さんのご自宅へ伺うところから始まります。30分から1時間30分の（長時間の場合もあり）



訪問中に必要なケアを行い帰ります。在宅は病院のように24時間看護師がそばに居るわけではありません。訪問看護師は訪問時間に得た情報をもとに、今後の予測をし、必要ならば医師に報告し指示を受け、ご家族へ必要な説明や指導を行い、ケアマネージャーや他サービス事業所へも連絡しておく、といった他職種連携が重要になります。

それゆえ、ほとんどの訪問看護ステーションは、24時間連絡体制をとり、緊急時にはいつでも訪問できる体制をとっています。交代で携帯電話を持ち、待機しています。相談があればいつでも相談にのり、緊急要請があれば真夜中であろうと訪問しなければなりません。

訪問看護師は究極のジェネラリストです。「老年看護」「精神看護」「小児看護」「がん看護」「成人看護」すべての知識が必要でしょう。

実際は、こういった枠を一旦はずして、“その地域で生活する人であり、家族である”という視点から入ります。その地域で今まで生活してきた人が病気をもち、その病と共に生きることになったのです。その人のこれまでの生きてきた過程を尊重しながら、病と共に生きていく方法を、本人様・ご家族と共に考え、支援していくこと



▲訪問中の様子

が訪問看護の仕事であり、そこにやりがいがあるのだと思います。

学生のみなさん、訪問看護に必要なことは「生活をみる」ことです。自分で家事をこなし料理をし、家計をやりくりして下さい。その中で「生活を

をする」ことはどういうことなのか自分なりに考えてください。そして、大いに話しましょう。最近は携帯やパソコンでお話しする機会が増えましたが、それでは十分な議論はできません。日頃から多くの人と（友人だけではなく）語ってください。自分の言葉で、自分の気持ちを伝えられるようにしましょう。

多職種と連携するにはコミュニケーション力は必要な力です。

訪問看護ステーションは県下71カ所、それぞれの地域にあります。在宅での療養が必要になったとき、病気について不安な時や介護について相談したいとき、いつでも声をかけてください。お知り合いのケアマネジャーさんや、行政窓口でも紹介して下さるはずです。訪問看護連絡協議会のホームページもあります。

こちらからアクセスし、最寄りの訪問看護ステーションを調べることも可能です。

→ **滋賀県看護協会ホームページからアクセスできます。**

<http://www.shiga-kango.jp/>



▲訪問入浴の様子



▲ステーション内研修
業者を招いての新機器の説明。



▲訪問中の様子

訪問看護師の声

- 病院勤務から、訪問看護がしくて訪問看護ステーションにきました。
- 訪問看護が好きな仲間と共に、毎日甲賀の町を走っています。



文: **NPOみなくち訪問看護ステーション**

統括所長・訪問看護認定看護師 **駒井 和子**

〒528-0049
甲賀市水口町貴生川892-7
TEL 0748-63-1242
FAX 0748-63-1245

病院の名前は知っているが、どんな病院か全く知らない方が多いのではないのでしょうか。

このコーナーは、そんな地域のみなさまや医学生・看護学生のみなさまに、滋賀県内の医療機関を知ってもらうために設けました。

シリーズ第1回に引き続き、県内臨床研修指定病院から自己紹介していただきます。

市立長浜病院

所在地：〒526-8580 長浜市大戎亥町313番地
TEL:0749-68-2300 FAX:0749-65-1259
<http://www.biwa.ne.jp/~nch/>

病院の概要

管理者：野田 秀樹
院長：多賀 俊明
病床数：624床
診療科目：22診療科



病院理念

地域住民の健康を守るため、
「人中心の医療」を発展させ、地域完結型の医療を進めます。

市立長浜病院は、湖北地域はもとより隣接地域をカバーする基幹病院として1日約1300人の外来患者と、624床の入院患者の診療を行う22の診療科を有する病院です。初期医療から高度先進医療のほか、救急において24時間体制の幅広い医療を実践しており、全人的なプライマリケアを含めた質の高い医療を行っています。

また、当院では、これまでから県内他病院に先んじて、健診センターの拡充、新生児・周産期治療部門やICU・CCUの充実、地域密着型の先進的医療施設としての開放型病棟開設、療養型病棟の整備、トータルオーダリングシステムの導入など、患者本位の医療の提供に努めてきました。

平成24年度は、脳卒中急性期の患者さんの治療室SCUを設置したほか、透析室を院内において移転し専用ベッドを40床に増床しました。平成25年度からは、湖北保健医療圏唯一の拠点として「回復期リハビリテーション病棟」と、地域がん診療連携拠点病院として「外来化学療法室」を拡充し、運用開始予定です。さらに病院機能の再構築をめざし「診療支援棟（仮称）」の開設を計画中であり、これにより救急機能の集約とともに医師の勤務環境の改善を図っていきます。

このように市立長浜病院は、地域住民の健康を守るための医療を推進し、地域完結型の病院として患者が安心して治療に専念できる病院づくりに常に取り組んでいます。

■市立長浜病院・看護局理念

そっと寄り添い 手の温もり 心の温もりを伝えます。



市立長浜病院 看護局長 松田 和子

市立長浜病院は、地域に根ざし、地域に愛される病院として、70年近い歴史を歩んで来ました。看護局では、先輩たちが育み引き継がれてきた看護の本質を語り、科学的根拠に基づく看護実践を行うことで、患者さんの生命力や自然治癒力を高めることを、看護実践を通して証明しようと取り組んでいます。

また、高度な医療を提供する急性期病院、回復期の療養を提供する病院として患者さんが安全で、安心して医療を受けられるよう、思いやりを込めて心に届く看護を提供していきたいと考えています。急性期、慢性期、回復期、在宅へと地域に密着したこれからの医療・看護を追求する市立長浜病院で、看護の技術を磨き、看護の手応えを私たちとともに実感しませんか。

看護大好き、人間大好き、明るく元気な方、一緒に看護の手応えを探し、実践するなかで、共に看護の喜びを感じ取りましょう。温かい心のこもったケアのできる皆さんをお待ちしています。

■市立長浜病院・社会福祉法人青祥会 セフィロト病院

合同臨床研修プログラム

市立長浜病院の研修プログラムにおける研修は、精神科を除く全ての領域を市立長浜病院で行います。精神科(選択必修)の研修は、徒歩数分の距離にある「セフィロト病院」で、地域医療研修は、多種多様な研修医のニーズに応えられる湖北保健医療圏内の診療所で行っています。

研修プログラムの目的は、「医の原点」とも言うべき救急医療、全人的なプライマリケアを重視した初期研修の場の提供や人材育成にあると考えています。

2年の研修期間のうち前半では、「プライマリケアに必要な基本的な知識と技術の修得にあてる期間」として、各内科専門領域全般を実践的な当直研修を交えて修得することをめざしています。

研修後半では、最大11か月の選択科目期間が設定できます。研修医一人ひとりの希望に応じた柔軟なプログラム設定が可能であり、自主性が尊重され、かつ求められるプログラムとなっています。

1年次あたりの研修医数は4～5名で推移していることから、同一の期間に、同一の診療科へローテートする研修医を原則1名としており、指導医資格を持った医師(院内に30数名)と若手医師による「マンツーマン指導」を実現しています。

さらには、研修医対象の自主学習会、スーパードクターを招いてのカンファレンスといった学びの機会、病院近隣にある医師宿舎は自己負担額2万円で利用いただけるなど、研修環境が十分に整っています。

なお、本年度の臨床研修医のマッチングも定員5人にフルマッチとなっています。



臨床研修医・リフレッシュ研修(於:京都)



臨床研修医・病院説明会(於:大阪)

【研修協力施設】

医療法人社団雨森医院
医療法人社団源内クリニック
あざいリハビリテーションクリニック
浅井診療所
医療法人おくだ医院
医療法人布施クリニック
医療法人橋本医院
地域包括ケアセンターいぶき
医療法人下坂クリニック

市立長浜病院 院長 多賀 俊明

当院は臨床研修制度の開始以来ほぼ絶えることなく、また近畿地方に限ることなく関東から九州にかけて広く研修医を採用してきました。また、研修終了後も半数以上の研修医が後期レジデントとして残ってくれてきました。しかし、後期レジデントの後には、もちろん当院に残ってさらなる研鑽を積むことも可能ですが、「更なる飛躍を目指して全国の名だたる専門施設で腕を磨きたい」とか、「大学医学部での研究に取り組みたい」など、本人の意思に合わせて対応しております。さらに「腕を磨いて戻って来たい」とか、「研究を終えて戻って来たい」というような方には諸手を挙げて歓迎したいと思っています。

「長い眼で見て若い医師を育てていく」、これが当院の人材育成の基本と考えています。このことは臨床研修医のみならず大学から派遣された若い先生にも、また看護師さんにも、さらには薬剤師さん、医療技術系の人たちなど病院のすべての人たちに当てはまることです。当院がそのような方にとっての次へのステップとなれば、またその後そのような方が当院に戻ってこられれば、喜ばしい限りです。





日本赤十字社

長浜赤十字病院



病院の概要

病床数：504床（一般430床、精神70床、感染症4床）

診療科目：内科、消化器内科、循環器内科、糖尿病・内分泌内科、神経内科、血液内科、呼吸器内科、内視鏡内科、肝臓内科、小児科、精神科、救急科、外科、乳腺外科、肛門外科、呼吸器外科、整形外科、脳神経外科、形成外科、内視鏡外科、皮膚科、泌尿器科、産科、婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、リハビリテーション科、放射線科、病理診断科、麻酔科、歯科口腔外科（31科）

主な機能：救命救急センター、地域災害医療センター、地域医療支援病院、地域周産期母子医療センター、滋賀県地域がん診療連携支援病院、滋賀県肝疾患専門医療機関、臨床研修指定病院、第二種感染症指定医療機関、AIDS協力病院、臓器提供施設、精神科応急入院指定病院、各種実習協力病院

「自然と歴史が調和した街で」

当院は、東に伊吹山を仰ぎ西に琵琶湖を望む豊かな自然に囲まれ、歴史を感じる佇まいを数多く残す大河ドラマでも有名な長浜に位置します。「人道と博愛」の赤十字精神にのっとり、やさしさのある全人的医療を提供することを病院理念に掲げ、湖北地域の救急医療、地域医療、周産期医療等に貢献できるよう日夜取り組んでいます。また、赤十字病院の特色の一つでもある救護班を常備し、災害発生時にはいつでも出動できるよう準備しています。



救命救急センター、地域災害医療センター

県北部の救急医療を担う救命救急センターとして365日数多くの救急患者を受け入れます。また、地域災害医療センターとして救護班・DMAT、備蓄倉庫を備え、災害発生時にはいつでも力が発揮できるよう多種多様な訓練も行い準備しています。



地域周産期母子医療センター

湖北・湖東の周産期医療の中心的役割を担うべくNICU・GCUを改修し、県内及び近県外の周産期医療施設と連携・協力して母体搬送、新生児搬送等24時間対応しています。多くの低出生体重児がNICUで治療を受けています。

地域医療支援病院、滋賀県地域がん診療連携支援病院

地域の中核病院として地域に根ざした医療が展開できるようスムーズな患者の紹介・逆紹介のシステムを構築するとともに、地域の医療従事者の資質向上を目指し公開講演会・研修会も数多く開催しています。また、地域の診療所へも実習等で受け入れていただき、良好かつ密接な病診連携を推進しています。

精神科医療

平成24年9月にリニューアルした2号館では、精神科救急医療施設として増設した保護室・準保護室で急性期の精神科患者を受け入れるとともに、社会生活のストレスを癒していただけるようアメニティの充実したストレスケアユニットで心身共に療養していただいています。また、社会復帰を目指す患者支援のためにデイ・ケアやリワークも積極的に行っています。



医学生のみなさんへ

長浜赤十字病院 院長 濱上 洋



平成25年12月竣工予定の改築工事ですが、その一環としてこの9月に新2号館が完成しました。診療部門としては精神科の外来・病棟、リハ、透析と医局、看護部が入りました。精神科はそれまでの100床を70床に減床して、赤十字らしい急性期に重点をおいた精神医療を志向します。近隣のみならず県内外の精神科病院・診療所との連携を強化してまいりますので、若く意欲的な医師の参加に期待しています。

研修医室はスペースの関係で別フロアですが、他の全ての医師は1箇所の総合医局に電子カルテを備えた机を持つことになりました。診療科内、診療科間のコミュニケーションがより進んでいるようです。また医局内に3つのベッドとトイレ・シャワーを備えた女医ラウンジを配置しました。現在は20%余の当院女性医師の将来の増加を見込んだもので、人目を気にせずひと時の休息をとって頂きたいと思います。

外来患者数は最大時1700人から現在の1000人に押さえましたが、これからも種種工夫を凝らして持続可能な勤務医環境を目指してまいります。

看護学生のみなさんへ

長浜赤十字病院 看護部長 中島 すま子



当院では、「やさしさをかたみに」のキャッチフレーズのもとに日々看護を実践しています。看護職が働き続けられるためには、「働きやすさ」と「働きがい」の両方が大切と考えます。このことを基盤に置き、看護ケアに専念できる環境づくりを目指し、ひとり一人の看護師が働きがいを持って自律していけるように教育体制を整えています。

新人看護師の方にはプリセプターや先輩看護師、新人教育指導者など、みんなでサポートできるように屋根瓦方式の教育システムを行っています。また、教育専従の看護副部長がメンタル面のサポートを行い、いつでも個別に相談できるように体制を整えています。

インターンシップも実施していますので、自らのキャリアプランを考える機会として参加してみませんか？あなたのポジティブな想いをみんなで応援します。

先輩看護師のひとり言 (^o^)

“妊産褥婦さんに寄り添える助産師になりたい”……そんな思いを胸に抱きながら、滋賀医大の助産課程で必死に学んでいたのは数年前。現在は当院の産婦人科病棟で助産師として働いています。お産は正常ばかりではないということを実感する毎日ですが、そんな中でも、やはり小さな命……新しい家族の誕生の瞬間は感動的で笑顔がこぼれます。当院は若手助産師が多く、スタッフみんなが和気あいあいと働いており、医師も交えて季節折々の女子会を開催しています。新しいことを始めてみようというチャレンジ精神も高く、今年は助産外来とマタニティヨガ教室がスタートする予定です。ぜひ、一緒に新たな一歩を踏み出していましょ！

先輩研修医は夜つくられた!?

“医者には夜つくられる”といひます。長浜赤十字病院では研修医は1年目の5月から原則週に1回副当直に入ります。当院は1次から3次救急まで殆ど救急搬送の要請を断ることのない救急病院です。このような病院で常に指導医の元で診療行為に参加すること、研修期間中に内科・小児科・外科当直のすべてを経験できることが、当院での研修の特徴です。ほとんどの科が救急当直に携わっているため、当院では診療科の垣根が低く非常にアットホームな雰囲気、研修医同士も楽しく和気あいあいとやっています。

この病院で育ったことを誇りに思える仲間が一人でも増えることを楽しみにしています。



新入職員リフレッシュ研修

長浜赤十字病院

所在地：〒526-8585
滋賀県長浜市宮前町14番7号
TEL：0749-63-2111
FAX：0749-63-2119
URL：<http://www.nagahama.jrc.or.jp>



滋賀医科大学学園祭『若鮎祭』(10月27日^土・28日^日)において、 本機構の活動内容等を展示しました

大学福利棟1階において滋賀医科大学里親学生支援室と合同で、本機構の事業や活動内容等をご覧いただけるビデオの放映や写真の展示等を行いました。



また、宿泊研修の御縁で平成21年から毎年出店されている東近江市のブースでは、地域特産の焼き芋やジェラート販売で、東近江市をPRされていました。



あいにく28日は雨天となりましたが、27・28日はご参加いただいた方々との交流の場となりました。

来春3月に甲賀地域への宿泊研修を実施します!!

春の宿泊研修では甲賀地域を訪問し、地域文化に触れさせていただくとともに、地域の医療従事者や地域の方々との交流を図ります。

県外大学に進学されている学生さんのご参加をお待ちしています。

研修に興味のある学生の方、

まずは滋賀医療人育成協力機構まで、電話またはメールを。

滋賀医療人育成協力機構 事務局

TEL : 077-548-2802 FAX : 077-548-2803

E-mail : satooya@belle.shiga-med.ac.jp



滋賀医科大学里親支援室では、里親を募集しています

里親とは

県内で活躍されている本学卒業生や県内医療従事者(医師・看護師・保健師・助産師)が、里親登録学生の身近なサポーターとなっていただき、メール等での連絡や、双方の交流を通して医療人としての心構えや地域医療の現状等を里親登録学生に伝えていただくことです。

現在、里親登録学生は91名。一方、里親登録者は69名です。

里親への登録方法は

滋賀医科大学里親学生支援室ホームページの里親募集フォームからご登録ください。

<http://satooya.shiga-med.ac.jp/>

会員の状況

平成24年度正会員・賛助会員、およびご寄附をいただきました方々の状況をお知らせします。

平成24年11月1日現在



会員の種類	会員数
個人正会員	60名
団体正会員	43団体
個人賛助会員	72名
団体賛助会員	2団体
ご寄附	45団体 156名
ご協力	1団体

入会のご案内

周囲の方にも、
一声おかけ下さい。

皆様からの会費と寄附金を財源として、事業計画に基づき活動を進めてまいります。
団体、篤志の方々にご入会いただくことにより活動が成り立ちますので、どうぞご協力いただきますようご案内いたします。

正会員： 本機構の目的に賛同して入会いただく個人または団体
(総会での決議権を有します。)

正会員の種類	会 費		入会金 (初年度のみ)
個人	正会員費 2,000円	寄附金 3,000円以上	5,000円
団体	正会員費 5,000円	寄附金 5,000円以上	10,000円

- ・ 所定の入会申込書に必要事項をご記入いただき、事務局までご送付ください。
- ・ HP (<http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/>) から入会可能です。
- ・ 会費は、所定の振込用紙にて、最寄りのゆうちょ銀行からお振込みください。
- ・ 初年度につきましては、会費と入会金の合計金額をご入金ください。

賛助会員

- ： 本機構の目的に賛同いただいた個人または団体
個人・団体とも、1口1,000円以上をお願いします。
(できましたら、認定NPO法人としての基準を満たすため3,000円以上をお願いします)
- ・ 入会申込書をご提出いただく必要はありません。
 - ・ 会費は所定の振込用紙にて、最寄りのゆうちょ銀行からお振込みください。
 - ・ 入会金をお支払いいただく必要はありません。

ご寄附

- ： 機構の活動資金として皆様からのご篤志をお願いします。
できましたら、認定NPO法人としての基準を満たすため3,000円以上をお願いします。

滋賀医療人育成協力機構は、本機構への寄附者が税制上の優遇措置を受ける事のできる「認定NPO法人」になることをめざします。

当機構HPをご覧ください！

HPでは、機構の取り組みや実施状況をタイムリーにアップしています。
また、医学・看護学生向けに実習情報の掲載も行っておりますので、
是非ご覧ください！

URL : <http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/>

編集後記



早や12月を迎え、慌ただしく毎日をお過ごしのことと存じます。

滋賀医療人育成協力機構ではこの夏、2つの大きな事業を実施しました。

1つは夏のワークショップです。例年は診療所での体験実習を報告する場としていますが、今回は、川喜田晶子先生をお迎えしKJ法の説明を受け、実践してみました。

参加者にとってまとめることは大変難しいようでしたが、この新たなまとめ方法に興味をもっていただけたようです。

もう1つは、夏の宿泊研修です。今回は東近江市を訪問させていただきました。

3年前の夏に一度研修させていただいた際には、医師不足のために閉鎖されていた国立病院機構滋賀病院の病棟には患者さんが入院され、行政・地域病院・大学の協力のもと、新たな体制づくりに向け地域全体で協力されているのが印象的でした。

また、見学先の診療所や病院では、数名の研修医や、実習中の高学年医学生と出会えました。大学病院実習だけでなく、学外実習をとおして医療を学んでおられる学生さんに会えて大変うれしく思いました。今回の宿泊研修でも、多くの方々にご協力いただき本当に有難うございました。

さて、本機構誌編集委員会では「めでのる3号」から、県内各地で地域医療に取り組んでおられる医師、看護師の方々にく働き甲斐や苦労話などを語っていただく「ひとシリーズ」と、県内在住の方々にく県内各地域の特徴等を紹介していただく「地域自慢シリーズ」を企画しました。

この「ひとシリーズ」、「地域自慢シリーズ」では、皆様の投稿原稿を掲載させていただきますので、皆様からのご投稿をお待ちしております。

また、当広報誌名は、前号までは仮称としておりましたが、今回からは正式に「めでのる」とさせていただきますことを、ご報告申し上げます。



NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでのる」vol.3

発行：平成24年12月1日

編集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構

所在地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内

TEL：077-548-2802 FAX：077-548-2803

Email：satooya@belle.shiga-med.ac.jp

URL：<http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/>